

第1回札幌市オリンピック・パラリンピック教育検討会議 議事録

日時： 平成29年7月18日（火）16:00～18:00

場所： S T V北2条ビル地下1階A B会議室

出席者：

○委員

北海道教育大学岩見沢校芸術・スポーツ文化学科 教授	山本	理人	委員
札幌オリンピックミュージアム監修者、中京大教授、 JOA(Japan Olympic Academy)委員	來田	享子	委員
オリンピックミュージアム名誉館長、 競技団体連絡会議アスリート部会部会長	阿部	雅司	委員
北海道オリンピック・パラリンピアンズ事務局、 競技団体連絡会議アスリート部会副部会長	鈴木	靖	委員
冬季パラリンピアン、 競技団体連絡会議アスリート部会委員	永瀬	充	委員
西区PTA連合会会長	荒	光弘	委員
東月寒中学校教頭	秀島	起也	委員

欠席者：

夏季オリンピック	成田	郁久美	委員
平岸高台小学校校長	大牧	眞一	委員

次第：

- 1 開 会
- 2 スポーツ局長挨拶
- 3 委員自己紹介
- 4 設置要綱説明
- 5 議 事
 - (1) 座長選出
 - (2) 資料説明
 - (3) 意見交換
- 6 閉 会

《配布資料》

- 資料 1 札幌市オリンピック・パラリンピック教育検討会議設置要綱
- 資料 2 札幌市オリンピック・パラリンピック教育検討会議委員一覧
- 資料 3 札幌市オリンピック・パラリンピック教育検討会議事務局一覧
- 資料 4-1 オリンピック・パラリンピック教育の取組状況について
- 資料 4-2 オリパラ教育に関する学習指導要領上の位置付け等について
- 資料 5-1 平成 29 年度オリパラ教育に関する事業内容
- 資料 5-2 平成 28 年度オリパラ教育推進事業研究推進校一覧
- 資料 6 札幌市オリンピック・パラリンピック教育検討会議の取組について
- 資料 7 札幌オリンピックミュージアムについて
- 資料 8 本会議における検討案

《参考資料》

- 参考 1 スポーツ庁「オリンピック・パラリンピックに関する指導参考資料」
- 参考 2 東京都教育委員会「オリンピック・パラリンピック学習読本」
- 参考 3 札幌市スポーツ局「オリンピック・パラリンピック教育に関する学習資料」
- 参考 4 IPC 公認教材「I' m POSSIBLE」

発言者	発言要旨
1 開会	
事務局	<p>開始時間となったので、第1回札幌市オリンピック・パラリンピック教育検討会議を開会する。</p> <p>座長選任までの間、私、札幌市スポーツ局招致推進部長の梅田が進行させていただきます。</p> <p>本会議は、札幌市オリンピック・パラリンピック教育検討会議設置要綱の第4条第4項により、委員の過半数の出席が必要だが、本日の出席者は委員9名のところ7名に出席いただいているため、会議は成立となることを報告する。</p>
2 スポーツ局長挨拶	
事務局 石川スポーツ局長	<p>はじめに、石川スポーツ局長よりご挨拶申し上げます。</p> <p>東京2020大会まで3年となり、全国的にオリパラムーブメントが高まる中、札幌市でも平成28年度から「オリンピック・パラリンピック教育推進事業」を実施しており、若い世代に向けてオリパラの理念を広める取組みを始めたところ。</p> <p>今後、こうした取組みをより効果的なものにするため、オリパラ教育推進のための具体的な方策を検討していきたいと考えている。</p> <p>札幌は1972年アジア初の冬季オリンピックの開催都市であり、今もう一度招致を目指している、オリンピックと関わりの深いまちである。</p> <p>委員の皆様方には、こうした札幌らしさを取り入れたオリパラ教育の方策について、教育の専門家としての視点、オリンピック・パラリンピアンや保護者の目線により、様々な角度から多様なアイデアを出し合い、活発にご議論いただきたい。</p> <p>そしてオリンピック・パラリンピック教育にとっての最高の教材は、大会の開催である。子どもたちに夢や希望を与え、共生社会の実現を図るため、再びこのまちでオリンピック・パラリンピックが開催できるよう、皆様のご協力・ご支援をこの場をお借りしてお願いしたい。</p>
3 委員自己紹介	
事務局	<p>続いて、委員一覧に沿って、私から紹介した後、皆さんより一言ずつご挨拶を頂戴したい。</p> <p>(委員の氏名・肩書を読み上げ)</p>

山本委員	<p>○北海道教育大学岩見沢校芸術・スポーツ文化学科 教授 山本理人（やまもと・りひと）委員</p> <p>専門は保健体育科教育学と生涯スポーツ論で、学校体育から地域のスポーツまで幅広く研究している。今回はオリパラ教育の推進ということで、皆さんと様々な議論ができたかと考えている。</p>
事務局	<p>○札幌オリンピックミュージアム監修者、中京大学スポーツ科学部教授、JOA（Japan Olympic Academy）委員 来田享子（らいた・きょうこ）委員</p>
来田委員	<p>オリンピックムーブメントの歴史研究が専門で、JOA にも参加しながらオリンピック・パラリンピック教育に携わっている。東京都教育委員会の教科書を監修したため、より良くするための議論を皆さまとしていきたい。</p>
事務局	<p>○札幌オリンピックミュージアム名誉館長、競技団体連絡会議アスリート部会部会長 阿部雅司（あべ・まさし）委員</p>
阿部委員	<p>名寄市スポーツ振興アドバイザーとして昨年から勤務をしている。オリンピックは現役として3回、コーチとして5回経験した。今回はオリパラ教育ということで、自分が経験してきたことを役に立てられたかと考えている。</p>
事務局	<p>○北海道オリンピック・パラリンピアンズ事務局、競技団体連絡会議アスリート部会副部会長 鈴木靖（すずき・やすし）委員</p>
鈴木委員	<p>オリンピックは1984年サラエボ大会スピードスケート500mに出場した。現役を終えたあとは後身の育成も行ってきたが、昨年度からは札幌市内の学校にオリンピックやパラリンピアンを派遣する札幌市教育委員会の事業に携わっている。色々な分野で力を合わせたら素晴らしいものができるかと信じているため、その一翼を担いたいと考えている。</p>

事務局	○冬季パラリンピアン、競技団体連絡会議アスリート部会委員 永瀬充（ながせ・みつる）委員
永瀬委員	1998年長野大会から4回パラリンピックに出場した。2年前に引退をし、セカンドキャリアを悩んでいたところ、今年2月から北海道新聞社でパラスポーツアドバイザーとして活動している。今パラスポーツに興味を持たれているため、当事者から積極的にPRするチャンスである。子どもたちにも伝えていきたいと考えている。
事務局	○西区PTA連合会会長 荒光弘（あら・みつひろ）委員
荒委員	本日は札幌市の保護者の代表として出席していると思っている。これまでPTA活動を7年間行ってきた。保護者の視点から札幌市のオリパラ教育に貢献できればと考えている。
事務局	○東月寒中学校教頭 秀島起也（ひでしま・たつや）委員
秀島委員	昨年度、オリパラ教育推進校として一年間取り組み、本日出席の阿部委員にご講演いただいた。本校は人権教育にも取り組んでいるほか、ボランティア活動にも力を入れている。学校現場からの意見を出せたらと考えている。
事務局	なお、夏季オリンピックの成田郁久美（なりた・いくみ）委員および平岸高台小学校校長の大牧眞一（おおまき・しんいち）委員は、本日所用により欠席。委員のご紹介は以上。
4 札幌市オリンピック・パラリンピック教育検討会議設置要綱の説明	
事務局	当検討会議の設置要綱について説明する。 (事務局から資料1について説明)

<p>5 議 事</p> <p>(1) 座長選出</p>	
事務局	<p>本検討会議設置要綱の第2条第3項の規定より、委員の互選により、座長を置くこととする。</p> <p>ご推薦のある方は、挙手の上ご発言をお願いしたい。</p>
阿部委員	<p>色々な分野に精通している山本委員を推薦したい。</p>
事務局	<p>ただいま阿部委員より、座長に山本理人委員の推薦があったが、いかがか。</p> <p>(異議なし)</p>
事務局	<p>山本委員に座長をお引き受けいただきたい。</p> <p>(山本委員が座長席に移動)</p> <p>山本座長にご挨拶をお願いしたい。</p>
山本座長	<p>札幌市はオリンピック開催の実績があるが、オリパラ教育の先行事例も見ながら、札幌らしさに加え、札幌に留まらず北海道全体へ広がりを持たせられるような、さらに2020年以降もオリンピック・パラリンピックの普遍的な価値を学ぶ機会が広がっていくことも視野に入れて、議論の深まりが増すことを期待したい。とりわけ、パラリンピックを契機に、身体障がいだけでなく知的障がいや精神障がいなど、障がい者全体に目が向くような広がりについても議論できたらと考える。札幌らしい良いモデルができることを期待する。</p>
<p>(2) 資料説明</p>	
山本座長	<p>議事(2)の資料説明について事務局よりお願いしたい。</p>
事務局	<p>(事務局から資料4～7について説明)</p>
山本座長	<p>事務局から説明のあった内容について、ご意見・ご質問はあるか。</p>
鈴木委員	<p>昨年、北海道オリンピック・パラリンピアンズという私たちの組織から学校に派遣して講演をしたが、講演に不慣れな方だと難しい。講師用</p>

	の手引きを作成し、共通して話をする部分を示してあげると講師の引受け手がもっと増えると思う。
(3) 意見交換 ①札幌オリンピックミュージアムを活用した学習モデル	
山本座長	議事(3)の意見交換に移りたい。 作業部会の素案について事務局より説明をし、それを軸として意見交換を行う。
事務局	(事務局から資料8について説明)
山本座長	事務局から説明のあった内容について、ご質問はあるか。
來田委員	オリンピックミュージアムを活用した学習モデルについて、基本的には社会科の枠内での展開を今後も考えているのか、科目横断的なものとしてイメージをしているのか、どのように考えているか。
事務局	教科横断的に行うことを基本方針としたい。
山本座長	他にご質問はあるか。 (質問なし)
	小学3年社会科を中心とした実施について、具体的なお意見を伺いたい。
阿部委員	4～6年でそれぞれ市内の施設を訪れているが、一回あたり何人くらいで訪問しているのか。というのもミュージアム内にあるシアターは定員が約60名のため、市内全小学校で行くとなれば日程調整が大変に思う。
事務局	基本的には学年単位のため、少ない学校だと3クラスで80名ほど、5クラスある学校だと150名ほどになる。
荒委員	オリンピックミュージアムでは夏と冬で体験できるものに違いはあるのか。

事務局	<p>年中無休で同じものを体験できる。</p>
山本座長	<p>3年社会科「わたしたちのまち みんなのまち」を中心として行うことを素案では考えている。1972年の札幌オリンピックは単なるスポーツ大会ではなく、今のまちの骨格を作ったという点では社会科の視点であるが、教科横断的に考えると他の活用方法もあるのではないか。</p>
來田委員	<p>オリンピックを招致しようとしている段階でミュージアムを持っているまちは他にない。それだけで北海道らしさが出ている。これをどう生かすのかだが、東京都の教材を作るために色々な先生たちと話しをする中で上手く実現できなかったのは、学習だから知識の提供をして、調べ学習をして終わりになっていること。ミュージアムがあって五感で感じられる場所に行って学ぶことができるため、机の上でできることと同じことはしない方がいい。現在、IOCがOVEPというプログラムを提供しているが、これはアクティブラーニングである。アクティブラーニングの本質は、自ら学習に取り組むという表面的なことだけでなく、答えの出ないものに向き合うこと。クーベルタンがオリンピックムーブメントを通して語りかけてきたことは人生哲学であるが、人生哲学というからには簡単には答えがでない。</p> <p>ミュージアムで知識を学ぶだけでなく、ジャンプ台を含めた広い空間を活用して体を動かしながら学べたらいい。また、ミュージアムは歴史を抱え込んだ場所であり、50年後に自分が訪ねたときに、そこに自分が歴史となって存在しており、自分らが学んだ何かが蓄積されていて、振り返れることが望ましい。これが次の世代を作ることに繋がるため、学びの中に自分自身が歴史になれる材料を入れるべき。</p>
山本座長	<p>知識のインプットではなく、様々な体験を通じて学ぶことが子どもたちの新しい価値を生成する。</p> <p>オリンピック・パラリンピックムーブメントには負の側面もある。素晴らしいものだとは決め付けて学びを終わらせるのではなく、例えば、環境問題やスポーツ振興を進める中にある課題に気づくこともオリパラ教育が持つ重要な視点。答えが決まっていない新しいものを生み出せるような学びの場を構築できたらと考える。</p>

鈴木委員	<p>物に触れるということが非常に重要と考える。展示物にもその歴史が説明されているとなお良い。</p> <p>もう一度行ってみたいと思うようなきっかけがあるといい。</p>
永瀬委員	<p>ミュージアムの改修にあたり、パラの展示ができた。オリンピック・パラリンピックが一つになってきていることをこのような場からも伝えていけたらと思う。</p> <p>パラ競技の道具は展示されているが、触れられるようにはなっていない。どのように乗るのか、もしくは乗ったらどうなるのかは、ものに触れることで子どもたちが感じられること。実際に選手が使ったものでなくてもいいので、道具を備品として持っていたらいい。</p> <p>パラリンピックはまちづくりと密接に関係している。長野パラリンピックを契機にバリアフリー化が進んだ。札幌で将来パラリンピックを開催するとなれば、パラリンピック選手たちがまちをどのように見ているのかという視点で考えるきっかけができる。</p>
山本座長	<p>スポーツの世界だけでなく、障がい者の日常生活に想いを馳せることで北海道のまちづくりにも次世代の子どもたちが気づいてくれると思う。</p>
鈴木委員	<p>バスでミュージアムへ連れていくということだが、これは借り上げバスか。</p>
事務局	<p>今年度に限っては借り上げバスだが、今後の具体は決まっていない。</p>
鈴木委員	<p>学校からミュージアムまでの移動時間があったくないので、移動中の教育も考えられると思う。</p>
永瀬委員	<p>クラスの中に車イスの児童がいたら、リフトバスなどで一緒に移動できるようにしてほしい。</p>
鈴木委員	<p>市でバスを保有できないとしても、取組みに賛同してくれる大手バス会社からの提供など民間の活用も考えたらいいと思う。</p>

秀島委員	<p>中学校でミュージアムを活用するとしたら、総合的学習の時間ではないか。本校では人権教育を学習の一つの柱としているが、障がい者理解についての学習を行うことができるため、中学生でも活用できる。</p> <p>旅行的行事に取り入れることもできると思う。</p>
山本座長	<p>理科という視点でも扱えると考えており、例えばロボコンのような形式でジャンプ台からロボットを飛ばし距離を競い合うということも教科横断的な学習として広げられると思う。</p>
阿部委員	<p>白馬では、ジャンプ台からスーツケースを転がして壊れないか実験をしたことがある。</p> <p>札幌でしかできないジャンプ台のバックヤードツアーを行い、スタート地点から札幌のまちを見下ろしたら、ほとんどの参加者が感動している。こうしたことを市内の全小学3年生にできるとしたら、とても良い経験になると思う。ミュージアムを活用した学習を行うなら、スタート地点からまちを見下ろす体験もセットにしてほしい。</p>
<p>(3) 意見交換</p> <p>②札幌らしさを生かしたオリパラ教育の「実践事例集」と「副教材」</p>	
山本座長	<p>効果的な実践事例集と副教材の作成について、ご意見をいただきたい。</p>
阿部委員	<p>現役時代に経験したことを講演ではお話しているが、僕以外の方が講演をするなら、伝えなくてはいけないことをパワーポイントなどで流れを作成し、その後に体験談を話してもらおうというような枠組みを示してあげると、引き受けられる人が増えると思う。</p>
永瀬委員	<p>パラリンピアンが全学校に訪問し話しをすることは不可能なため、「I' m POSSIBLE」という教材を活用してほしい。</p> <p>学習の手引きもついてはいるが、使い方の説明の時間を別途設けられたらと思う。</p> <p>IOCから今年「OVEP」という教材の日本語版が出されることも聞いた。「I' m POSSIBLE」と併せて活用できたらいいと思う。</p>
鈴木委員	<p>東京都の事例を見ても、各教員がオリパラの背景を理解して教えていくのは難しいと思うが、教員教育はどのように考えているか。</p>

事務局	現状、スポーツ庁の教材や「I'm POSSIBLE」など、教材は豊富にあるため、この活用方法の事例集を作成し提示をすることを考えている。
來田委員	実践事例集をつくるにあたり、モデル授業を行い、その記録を取り、事例化をして、それを落とし込むという手順でいいか。
事務局	研究授業のようなものを行い進めていきたい。
來田委員	モデル授業を行い上手くいかなかった場合、どこが問題だったのかを落とし込む。それを解決しようとして、実践事例の先を現場の先生が試し、そのフィードバックをもらうという発想で、時間を掛けて現場の先生たちと作っていくものと考えていいか。
山本座長	よくあるのは教科別の実践事例であるが、学年や教科を横断した取り組みを行っていくには失敗事例を含めて記録に残していくべき。 実践事例に関して他の視点からの意見もあればお願いしたい。
來田委員	マニュアル化することが一番よくないと思うので、色々試して失敗していいという空気感を事例集に残したほうがいい。 これまでの実践事例では、オリンピック反対の人との対話を入れていない。これは非常に良くなく、光と影の両方を見て、解決しようとする思考に導く学習を行うべき。 影の側面はアスリートがたくさん見てきているため、事例として落とし込むべき。
山本座長	礼賛教育はおかしいと思う。違う価値観に触れて、新しい意味や価値を生み出すことが学びの本質である。 事例集については失敗事例も語り継ぐことに意味があると思う。
荒委員	(副教材は) 対象が小学3年生であれば、あまり難しいことを伝えようとしても興味が失せてしまうと思う。わかりやすいことを題材にするといい。子どもが夢を持つような時間にしてほしい。 社会科の中で時間を割くとなると、試験に出るような授業の時間が減るのか。

事務局	新しく時間を割くのではなく、今ある授業の中に位置づけることを考える。
鈴木委員	アスリートが講話をすとなれば高学年の方がやりやすいが、小学3年生を対象にするのなら「フェア」という価値を重視して教えてほしい。
山本座長	最初の切り口として小学3年生を対象とすることについてはいかがか。 (異議なし)
来田委員	東京都でも事例を蓄積しているため、情報交換していくといい。
山本座長	小学3年生だけで終わらせるということではないため、小学3年生向けの教材を作成することと、5～6年生向けの教材(「I'm POSSIBLE」)が既にあることは取捨選択できるという点からもいいこと。 小学3年生の社会科に「わたしのまち みんなのまち」という学習があるため、これを使い子どもたちがミュージアムに行き、副教材により学びを深められたらいい。
鈴木委員	施設の歴史についても触れるとおもしろいのではないか。
山本座長	作業部会の先生から現場の声を伺いたい。
事務局 (作業部会)	小学生では社会科を中心として、子どもたちに伝えたいことに合わせたカリキュラムマネジメントを行いたい。現場で実践する難しさはあるが、それを支えるのは「感動」という言葉。1972年の感動を子どもはもちろん親も知らない世代のため、掘り起こすきっかけとしてミュージアムを活用するのはいいこと。3年生で体験学習を行い、高学年・中学・高校と繋がっていくといいと思う。
山本座長	このような学習を末長く続けていくためにも、丁寧な議論をしていかなければならないと思う。
永瀬委員	特別支援学級の子も一緒に学習を行ってほしい。

鈴木委員	<p>地理や気候的にこれだけオリンピックを開催するのに適したまちは少ないと思っているので、これを根本に教材を作っていけたらと思う。</p>
6 閉 会	
山本座長	<p>時間ですので、第1回目の会議を終了します。</p> <p>第2回目は札幌オリンピックミュージアムを視察するというプログラムも含まれているため、体験的に学びながらいいアイデアが作れたらと思う。</p>
事務局	<p>みなさま、本日は長時間にわたりありがとうございました。ただいま座長から案内があったが、第2回目は札幌オリンピックミュージアムの視察も検討している。詳細については、改めて案内させていただく。</p> <p>ご連絡は以上です。本日はお疲れさまでした。</p>